

14/10/2018-19:00

特にこれと言って予定もない日曜を寝転んで過ごすのももったいないような気がしたので多少遠出をして買い物がてら半年ぶりに息子の下宿に寄ることにした。今日は誰か連れ立つか連れ込むかの予定はないと一応聞いてから向かったが、幹線から脇にそれる道を曲がったあたりでたまたまその息子が通りかかった。聞くと夕食時だが昼食が遅かったために特に腹も減らない、しかし朝から引きこもりで息が詰まるから辺りが涼むのを待ってのこのこ出てきた様子。商店街の方へ行けば適当な店でもあるだろうといって坂の方へ下っていくことにした。歩きながら、息子が最近では単調な学食と味の濃い外食にそれぞれ飽きて自炊に凝りだしたことや、息子の高校からの友達 M が来週バイト先で塾長の代わりをやらされること、などを聞いた。

商店街の道は明るいがどこかすすけた暗さがある。すれ違う学生も気の抜けた感じで、あまりよそ行きという具合ではない。息子が立ち止まらないのでしばらくついていくと商店街を抜け、駅前通りに出た。地元にもあるタコ焼きのチェーン店がある。どうもこの通りは黄色が目立つようだ。ファストフード店の黄色、居酒屋の黄色、ファストフード店の黄色、喫茶店のカーテンの黄色。真っ直ぐ行くとこれまた黄色の看板のタコ焼き屋があった。息子が入ろうというのでついて入った。私もたいして空腹ではなかった。店内には 60 前後くらいの女店主がいて、カウンターに並ぶと、3、4 分ほど待ってくださいねと声をかけられた。皺の上に眼鏡がかぶさった店主の肩の後ろに、この店では作り置きはしていませんと書いてある張り紙が見えた。息子は奥のテーブルに座ろうとしたのをそこは客用ではないと言われ引き返してきて、壁際のテレビで流れているのが野球の中継ではないと気づいて関心を失ったようだった。私の座ったカウンターからは、排気が沈着したテーブルの上の皿には天板と同じ色の冷めたカレイの煮付けが重ねられているのが見えた。どこにでもあるタコ焼き屋のように、店の鉄板は表の道路に面していて、そこから直角になるようにカウンターが伸びている。店内を見回しても見つからないので、値段の表示がないと息子に言ったら、入口の看板に 7 個で 300 円だと書いてあったよと言われた。

息子が携帯をいじくるのを横目で眺めていたら、はいよと声がした。出てきたタコ焼きはチェーン店のものとは違う小さいサイズで、ソースと青のりだけがかかっていて、フォークが 2 本添えられていた。今度の肩口には女店主の横にサングラスを掛けた同じ年くらいの長身の男が立っている、ただし 10 年くらい前に撮られたらしい写真が見えた。タコ焼きは熱そうに見えたのでしばらく息子が食べるのを見ておくことにして体をカウンターにもたれさせた。鉄板の上の壁には子供か常連の客かが描いたのか、ホオジロザメを模写し

た絵が貼ってあった。ぼうっとしていると、ちょっといいですかアさっき怖い人が来てねえ、と女店主が話しかけてくる。さっきねえ変な人がねえ、このへんの机の裏あるでしょ、ここらにおいてる小物を全部ベタベタ触っていったんですよ。なんか誰か来たら話そうと思ってねエ、変な人やったわア。後ろのコレも貼っていったんですよ。

息子は熱そうに口を動かしながらただ笑うだけなので、私が応対する必要があると思った。
—幾つくらいの人だったんですか、怖いですねえ。

—いやアあんなのは初めて、はじめてやわア、変な人でねえ、誰か来たら話そうと思ってたんですよ。そこのほうに古い新聞おいてあるでしょ、これ持って帰ってええかて聞いてくるんですわ。ああ、なに？いや初めてですよあれは…。え？ああまあおっさんゆうてね、ああおっさんなんてゆうたらアカンのやろうけどまあそんな感じのおっさんでしたわ。初めはね、なんか手品でもしよるんか思ったんです。

—それでその人はタコ焼き食べはったん？

—いやでね、やあ初めてやワアあんな怖い誰か来たら話そうと思ってねえ。はい、主人も帰ってくるの遅いからねエ、あ、いやお金はなかなか払わへんのでね、代金いただいてませんがと言わなしゃあないですよ、でもその間に机のこっちの方へ行ってベタベタ物触りよるんやわ、変な人やったわア誰かに話さな思てな、怖いからなあ。

—それいつ頃ですか？

—え？初めてやでほんまに、ああ、だいたい四時とかですなエ怖くてねえ、ほんと私は子供相手にシーソーをするような注意を払って、この空間を正気で満たすために会話を続けようとした。息子は少し食べるのを急ぎ始めたように見えた。

—ご主人はすぐ呼んだら来れるん？

—おっさん、いうんかなそれでな、この新聞持って帰ってもええかって聞きよるねんナア。怖くてね主人帰ってきたら言お思うわ

—ご主人は遅いんですか？危ないねえ

—それでな、こっちの方へ戻ってきてまた机の下触りだしよってな、

—危ないねえ、表のドア開けといたらいいんちゃいます？一応

—ねえこっち一人で表塞がれたら出られへんからねエ、ほんま怖いです

—ドア開けといたらどうです？また何かあるかもしれませんよ

—いや閉めよるねん、別に開けんでもええやろて、何回も戻ってきて閉めよるんですわ。よいしょ、カウンターの下ねそこにドライバーあるでしょ。これもこんなんそこには無かってんで、ほら見てみィや、よっと。その箱ね、もともとはこのチラシが入ったあってドライバーなんかあらへんねん。もとはこないなってな、これで貼りよったんやわもう終

わったやつやでこのポスター。ほんでこれはこないしてチラシが挟んであったんやわ。始めなんか手品でもするんかいなと思ったで、ほらそんな変な人やわからへんやん始めはネ。
—じゃあ見た目は普通の人やったんですか？

—ウン、見た目じゃわからんからね、手品でもする人やと、ほんでまたこんなファイルもろてええねえ、て言うんですわ。いやもうこれ終わったポスターでしてね、これも勝手に貼っていつてね、え？まあねそうです…え？そうですやっぱおかしい人なんやわ。ほら見てくださいもともこの箱はこないなってたんです。いやあ、あ、消防車走ってるわ顔をあげるとサイレンの後で、表の道路を消防車が2台並んで急ぐのが見えた。私は女店主が振り返ってそれに釘付けになるのをみていよいよ笑い出しそうになった。

—あら、なにかあったんかな

—消防車やねェ、えらい急いでるみたいやわ。2台やろ、うわァ3台もおる。どないなってるのや。よいしょ。えらい急いでるなあ

—まあ大したこと無くてたくさん出ていくこともあるみたいですよ

と言いながらも店主が店の外へ出てしまったので息子の方を見て笑うと息子も笑っていた。見るとタコ焼きは残り3つになっていて、食べたらどうだと薦められたので一旦息を吐いて食べ始めた。すると店主が戻ってきてカウンターの定位置に戻った。それでねェ、あんたテレビ見なはれ、とか言うんですよ。それでねェ。店主はカウンターを通り過ぎて奥のテレビ台の前の椅子に座って、それっきり黙り込んでしまった。すみません、ごちそうさまでした、と息子が言うと店主はテレビから体を離してカウンターに戻ってきた。はい600円のお返しです、と言って1000円札を受け取り、ソースまみれの紙皿を腰の前で握りつぶし、それからこちらを見つめてにっこりと笑った。

入り口の看板は出るときもやはり黄色かった。真っすぐ歩きながら息子が近づいてきて、あれを気が触れたって言うんかな、まあしゃあないんかな、といって歯を見せて笑った。